

## 風雅の種（二）

土田龍太郎

赤冊子に載れる右の師説と一たび比べ見であるべからざるは、笈の小文といへる道の記の序にて、ここにて桃青翁、百骸九竅ひやくがいきゅうけふに宿れる風羅坊もて筆を起し、わが來し方のくさぐさのこと述べりしすゑに、

夷狄を出で鳥獸を離れて、造化に隨ひ造化に歸れとなり。

と云ひて結びたり。

芭蕉遺文のたぐひにて造化に説き及べるとこさしも多からねど、この一語いとも重くして、蕉風俳諧の骨髓を得むとほりせば、その深きおもむきに思ひ凝らさではあるべからず。奥の細道にては、松島の風光を讚へて、造化の天工いづれの人か筆を揮ひ詞を盡さんと記したり。

すでに引ける赤冊子の一節、乾坤の變を云へれど、これやがて造化を指せりと見るもおほかたは誤りなかるべし。

同じ赤冊子にて土芳

松のことは松に習へ、竹のことは竹に習へ。

と云へる師説を引きて、私意を離るべく戒めたり。嵐雪らんせつまた或時集あるときしふの内にて、師の教へとて

花に問はば花語ることあらむ。姿はそれにしたがふべし。

と記せり。

されば風雅に遊ばむともがら、つねに月花に心をやりてかた時だにも造化に背くべからざるはさることなれども、造化のみにては風雅の出でることわりさらになし。笈の小文にて、造化に順したがひ造化に歸れと記せれど、これあとなきまで造化に歸入すべきを説けるに

てはよもあるべからず。造化のやがて風雅なるにてはあらず。されば蕉翁も、乾坤の變は風雅の種なりとこそ云へれ、乾坤造化のさながら風雅なりとはかつて説かざりしなり。

そも鳥獸はつねに造化のただ中にありて、いささかも離ることなし。形ばかりは人なれども鳥獸とさしも異らぬを夷狄と呼ぶなれば、これまた造化の外に出づることいとまれなるべし。されば桃青翁の、かたち像花にあらざる時は夷狄に等し、かたち心花にあらざる時は鳥獸に類すと記し、造化に隨ひ造化に歸れと言ひとじめたれど、これ花と月とをよすがにてつねに造化になじみ親しむべきをこそさ教へたれ、造化さながら風雅なりと説けりしにてはつゆあるまじきなり。人もしいささかにも造化を出でずとせば、かへりて鳥獸夷狄に異らねば人に生まれしかひとてはつひにあらざらまし。

刹那も止まることなく移り變りてやまぬ乾坤のはたらきを飛花落葉の中にて見とめ聞とむと説ける赤冊子に載れる師説のおもむきとみには悟りがたきぞおぼつかなき。

芭蕉翁の言靈ことだまに言ひ及べる例ためしさだかにはえたりがたけれども、造化の動きを刹那に止めて、風雅をうつつにかなへしむるは、人の心を種として生ひ茂る言の葉のはたらきのほかに求むべしとも思はれず。この言の葉のくすしきわざを今かりに言靈と呼ばむもさしたる咎なかるべし。

止めむとすれど止まるまじき乾坤のはたらきを見とめ聞とむとはそもいかなるわざを云へるにやあらむ。よしや刹那ばかりは止まるとも、やがて消えてあとなきまで失せぬべければ、

物の見えたる光、いまだ心に消えざる中にいひとむべし。

とはそもいかなる心にて師翁の説けりしにやあらむ、いともおぼつかなきこと右に述べりしのごとし。

物と我とあひ對むかひ、造化と言靈とあひ交はることのいさをしたへなることよなけれ

ど、これ彼我一如ひがいちにまと云はむよりは不即不離と云はむぞよろしかるべき。これはた造化の示

す咄嗟の機微を言の葉もてふと捉ふるわざなりとせば、稀有の邂逅ともや言ひつべからむ。思ひやるだにいとどはてなき心地つのりきてかしこきこといふはかりなし。

もとより止むべからぬ造化の移ろひをわづか刹那に止めて、つねは潜める風雅の誠のかつ現れかつ消ゆること、なまなかの人のえ及ぶさかひにあらぬはさることにて、ちはやぶる神の御魂のふゆのごとく、なにくれのえにしきざしもなくてゆくりなくふと見えくるものなりとせば、かかるくすしきをりに合はむことをひたぶるに待ちをらんほかすべなきにたり。

(令和三年七月二十日受附)